

【共通の設問】次の傍線部「けむ」の用法を答えよ。(答え・解説は解答編)

【第1部】基礎編 (Q1～Q20)

Q1.

昔、ある所に住みけむ人。

Q2.

古き都に花咲きけむ。

Q3.

など昔の人は嘆きけむ。

Q4.

唐土に渡りけむ僧。

Q5.

昔、世にありし人は皆、月を愛でけむ。

Q6.

いかなる縁にて、かかる目に遭ひけむ。

Q7.

かぐや姫を養ひけむ翁。

Q8.

昔の人、何処へ行きけむ。

Q9.

月の都に住みけむ人ら。

Q10.

昔の歌詠みは、いかに思ひけむ。

Q11.

古き世に榮えけむ国。

Q12.

など、かく憂き世に生まれけむ。

Q13.

旅人は、この山路にて、いかなる景色を見けむ。

Q14.

夜もすがら鳴き渡りけむ鳥の声を、我は聞かざりき。

Q15.

いにしへにありけむこと、いま伝はらず。

Q16.

なぞ昔の都は捨てられけむ。

Q17.

過ぎし夏、海辺に遊びけむ人ら。

Q18.

いにしへの宮は、何処にありけむ。

Q19.

この春、都に咲きけむ桜を、見ずなりにけり。

Q20.

昔の都の大路を、いかなる人か歩みけむ。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21.

唐土の人、書きとどめけむ書物、いまも伝はる。

Q22.

いにしへは、いかなる世にかありけむ。

Q23.

夜のうちに雪の深く積もりけむ山、朝はいと白し。

Q24.

なぞ唐土の人は和歌を解せざりけむ。

Q25.

月の都を出でけむ人。

Q26.

都を離れし日、かの人はいかばかり悲しかりけむ。

Q27.

昔より伝はりけむ物語、なほ尽きず。

Q28.

我が祖父は、いかなる人にかありけむ。

Q29.

仏に祈りけむ僧、いまもありや。

Q30.

いと尊くおはしけむ御方なり。

Q31.

いかで春はかく早く来たりけむ。

Q32.

いにしへの都人も、この道を通りけむかし。

Q33.

祖父の若き日にあひ知りけむ人も、今はみな亡くなりぬ。

Q34.

春の野に若菜摘みけむ乙女らの姿を、絵に描きたり。

Q35.

いかで悲しき夢を見けむ。

Q36.

我が父、そのころ何方にありけむ。

Q37.

京に住みけむ人なれば、言葉もみやびかなり。

Q38.

いにしへの歌にありけむ言葉。

Q39.

かの君の笛を聞きけむ人は、皆、涙落としけり。

Q40.

いかでかかる宝を得けむ。

Q41.

唐土に渡りけむ人々、なほ故郷を恋ふ。

Q42.

かの人の見けむ月かげを、我も今宵ながむ。

Q43.

昔の世、いかなる風ぞ吹きけむ。

Q44.

我が母、若き時にいかにありけむ。

Q45.

山中に隠れけむ人。

Q46.

古き友は、など、別れの日にも物も言はざりけむ。

Q47.

春来にけむ頃、まだ雪深し。

Q48.

いかなる御縁にて、かく長く生き給ひけむ。

Q49.

この道を極めけむ人こそ、まことに尊けれ。

Q50.

古き京を捨てけむぞ、惜しき。

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

Q51.

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ。

Q52.

花の盛りには人も多く集まりけむを、いまは訪ふ人もなし。

Q53.

いかで、かかる鄙に、かくめでたき人の生ひ出でけむ。

Q54.

昔、この浦に流されけむ人の心を思ひやる。

Q55.

古き世にありけむ寺の跡、いまも残れり。

Q56.

何の契りにて、この人に逢ひ初めけむ。

Q57.

仏前に祈りけむ心ぞ尊き。

Q58.

いにしへの人は、何によりてか、かく多くの物語を書き置きけむ。

Q59.

かの人のあづまへ下りけむ頃、我はまだ幼かりき。

Q60.

かの人、若かりし頃は歌詠みけむを、いまは詠まず。

Q61.

いにしへの人は、いかなる文字を書きけむ。

Q62.

かの二人は、別れの夜に何を語りけむ。

Q63.

古き寺を建てけむ人。

Q64.

春雨の降りけむ夜に、かの人、琴を弾きけり。

Q65.

月の出でけむ山際、なほ晴れわたる。

Q66.

昔の人の言ひけむやうに、世はただ夢のごとし。

Q67.

なにしに、かかる山里に来けむ。

Q68.

昔、この池に竜の住みけむを、里人は今も語り伝ふ。

Q69.

若き日は玉のごとくありけむ御姿も、いまは衰へ給ひぬ。

Q70.

いかでかく老いけむと、嘆く。

Q71.

この経を書き写しけむ人。

Q72.

家を離れしほどに咲きけむ花も、帰り来ればみな散りにけり。

Q73.

何の故にか、かの人は世を捨てけむ。

Q74.

山深く隠れ住みけむ人の、詠み置ける歌なり。

Q75.

かの文を見て、世の人はいかにか言ひけむ。

Q76.

古き人、皆嘆きけむ世の事。

Q77.

わが祖は、いづれの国より来けむ。

Q78.

春雪の降りけむ山里、なほ寒し。

Q79.

この文を書き置きしは誰にかありけむと、人々言ひあへり。

Q80.

昔は名高かりけむ人々も、いまは知る人なし。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81.

かの人も、心のうちにはさこそ嘆きけめ、人にはつゆ見せざりけり。

Q82.

前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。

Q83.

世に用ゐられざりけむ人も、後の世には名をあげたり。

Q84.

いにしへの歌詠みも、一首の歌に、かく心を尽くしけむ。

Q85.

かかる歌を詠み出でけむ人こそ、げに物のあはれを知りたりけれ。

Q86.

父の若き日に京に上りけむを、母より聞きぬ。

Q87.

何ゆゑに、この歌のみ世に伝はりけむ。

Q88.

かの人の都を出でにけむ後は、文の一つだに来ず。

Q89.

東路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもののあなるを、いかで見ばやと思ひつつ……

Q90.

いかなる宿世にて、かく人に忘れけむと、泣く泣く思ふ。

Q91.

家々の立ち並びけむ里の跡に、いまは草のみ茂れり。

Q92.

この庵に住みけむ聖も、かく月をながめけむ。

Q93.

などて、かの人の言ふことを聞かざりけむと、今ぞ悔しき。

Q94.

かの君に仕へけむ人ならずは、このことを知らじ。

Q95.

さばかり住み馴れし里を、など離れ給ひけむと、人々あやしがる。

Q96.

嵐山の紅葉、いま錦のごとし。ありし日もかくありけむ。

Q97.

いみじき宿世にて、后にゐ給ひけむ御方。

Q98.

いにしへの人の植ゑけむ松、今も門の前に立てり。

Q99.

この川の流れを見て、いにしへの人も世のはかなさを思ひけむ。

Q100.

物のあはれを知りけむ人々の心、いまも我れに伝はる。